

神楽通信

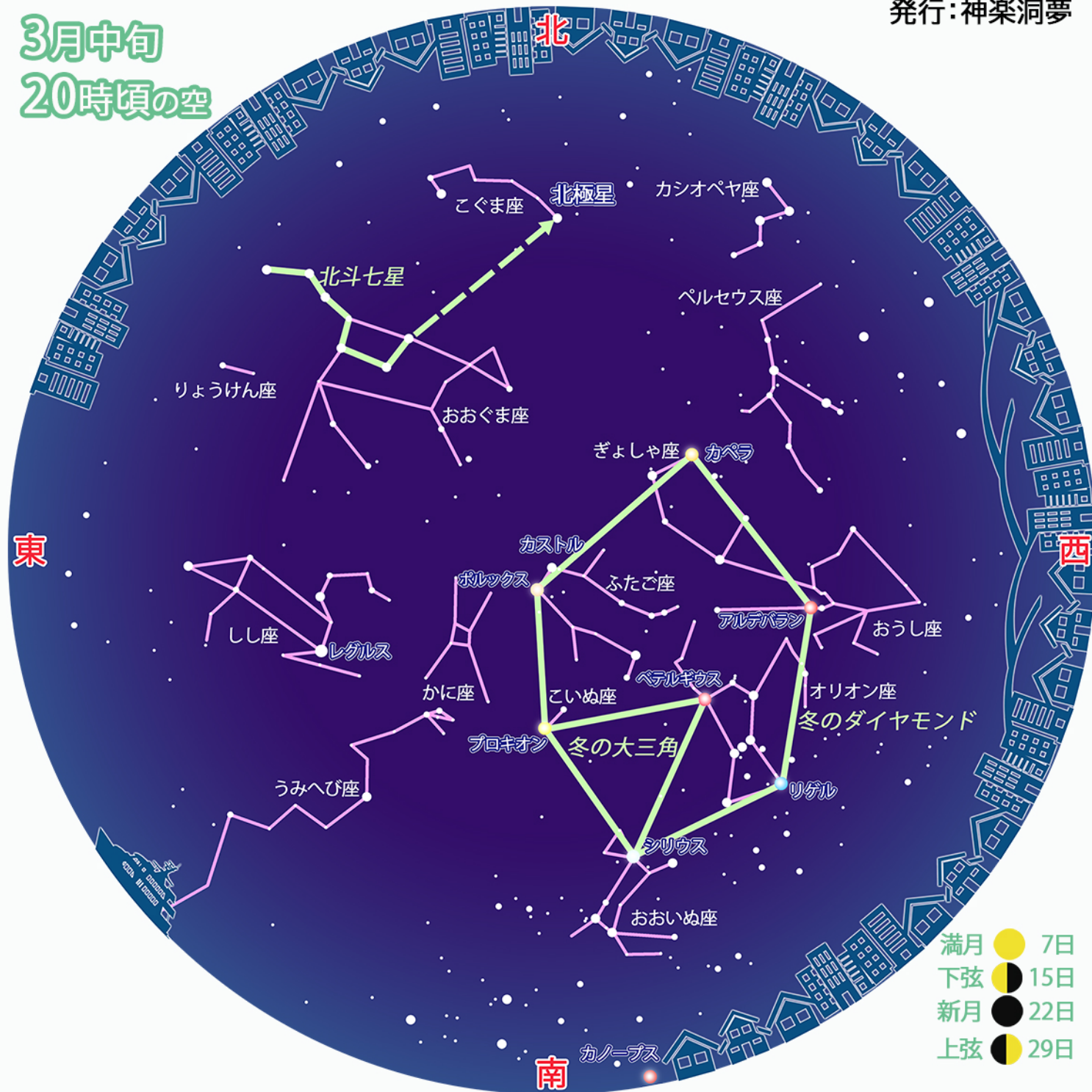
No.85

2023年

3月号

発行:神楽洞夢

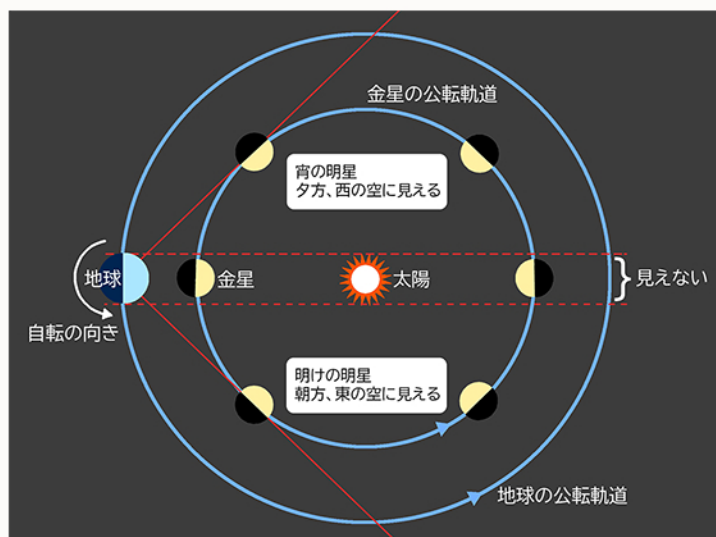
3月中旬
20時頃の空



3月21日が春分なので、星空も冬から春への変わり目の時季です。北東の空には、七つの星がひしゃくの形に並んだ北斗七星があります。ひしゃくの先端にある二つの星を結んで5倍延ばすと、北極星が見つかります。常に真北の空にある北極星は古来から方角を知るために用いられてきた重要な星です。春の星空を楽しむ際に、活用してみてはいかがでしょうか。

”一番星”金星

日の入りのころになると西の空で金星が徐々に高度をあげ、目立つようになっていきます。「宵の明星」といわれるように、金星はいま、 $-4.0 \sim -3.9$ 等級と、1等星の100倍近くの明るさで輝きます。夜空でいかにも目立ちそうな金星ですが、地球より内側を公転している内惑星のため、明け方や夕方にしか見ることができません。



過酷な環境の惑星、金星

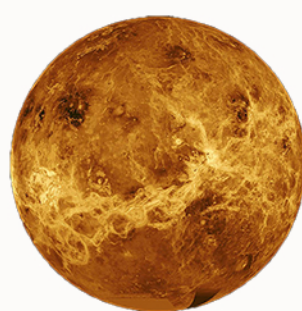
地上から見ると美しく輝いて見える金星ですが、その実態はどうなのでしょう。

金星は地球とほぼ同じ直径と密度の星であることから、「地球の双子星」といわれ、内部構造もほぼ同じと考えられています。

ところが、惑星表面の様子は全く違います。金星の大気組成はほとんどが二酸化炭素であり、「スーパー・ローテーション」と呼ばれる惑星の自転速度を上回る大気の流れが発生しています。その速度は大気上層部で秒速100mにもなります。

また、大気中の二酸化炭素や二酸化硫黄などが太陽光と化学反応を起こして、分厚い硫酸の雲をつくっています。厚さ数十kmにもなるこの雲は、金星の地表を覆い尽くし、大気中の二酸化炭素の温室効果によって、金星表面は気温460度、気圧は90気圧にも達する灼熱の惑星となっています。そして、硫酸の雲から降る硫酸の雨は、地表があまりに高温なため、地表に届く前に蒸発してしまします。

金星と地球の比較



金星



地球

約6052	赤道半径(km)	約6378
約0.815	質量(地球=1)	1
約5.24	密度(g/cm ³)	約5.51
約0.72	軌道長半径(地球=1)	1
約243日	自転周期	約1日
約224日	公転周期	約365日

画像:NASA/JPL

